

八 干 治

奥野健男編

人生論読本 第四卷



角川書店

人生論読本 IV

全12巻

太宰治 篇

昭和35年10月10日初版発行

編者

奥野健男

発行所

角川源義

印刷所

同興印刷株式会社

製本所

株式会社宮田製本所

発行所

株式会社
角川書店

東京都千代田区富士見町二
振替 東京一九五二〇八番

定価 二六〇円

落丁・乱丁本はお取替えいたします

“人生論読本”のしくみ

一、現代日本を代表する十二人の文学者、思想家の文芸作品や評論・随想などに述べられた人生語録を対話風に編集し、そのゆたかな思想を楽しい炉辺談話を聞くようにしくまれています。

一、引用された本文はこの読本の性質を考え、すべて教科書表記に改められています。この本を手にしたかたにより、改めて若き世代の人々に語られるように願ったからです。

一、本文の下端に本文中の語句のくわしい脚注をつけて理解の便をはかりました。また本文のなかから、親しみやすい箴言を抽出し、下端に○印で明記しておきました。つまり、○印の箴言を見ることによって、その出典が明らかになるわけです。

一、本文ごとに編者の懇切な解説をつけ、本文の梗概や、書かれた動機などを明らかにし、本文への理解と愛着とを深めるように企てています。

一、巻末に代表的な作家論、および年譜を載せ、原著者を主体的にとらえ、小伝記をかねていきます。

一、原著者を理解するための主要な参考文献の解題、主要な研究書を選んだ編者の解説がつけられています。

目次

I 家と宿命

人の手本

「家について」

選ばれてある宿命

II 純粹を求めて

マルキシズム

反立法の役割

九

九

一一

二九

五三

五三

五九

自意識と虚栄	七二
芸術について	九三
Ⅲ 生活と愛を求めて	一一九
ささやかな幸福	一一九
市民生活	一三二
生活のちえ	一五二
愛とことば	一六五
Ⅳ 古いものとの戦い	一八一
戦後の新現実	一八一
政治について	一九二
生きて行く力	一九七

革命について

二〇六

義のための戦い

二一三

家庭のエゴイズム

二二一

信頼は罪なりや

二三四

太宰治論

亀井勝一郎

二四三

太宰治主要参考文献解題

奥野健男

二五九

太宰治年譜

二七三

あとがき

奥野健男

二七七

表紙 佃 幸 野

太宰治

池水は濁りに
けごりし藤波の
影もうつらぶ
雨降りしきる
録左十夫歌
大正治

I 家と宿命

人の手本

明治四十二年の初夏に、本州の北端で生まれた気の弱い男の子が、それでも、人の手本にならなければならぬと氣どって、そうしてつまずいて、つまずいて、けれども、生きてある限りは、一筋の誇りを持って、ようとばかな苦勞をしているそのことを、いちいち書きしたためて残して置こうというのが、私の仕事の全部のテーマであります。

〔『富嶽百景』自序から〕

マイナスの人生

太宰治の一生は、人間の生き方の一つの極限の形を示しています。それは世のいわゆる常識や道徳とは真反対の、いわば破滅への人生、マイナスの人生と言って

もよく、わたしたちはかれの実人生をそのまままねすることはできません。しかし太宰のすべてをかけた凄絶な一生は、わたしたちの人生——世間の常識にもたれかかり、深く考えようとしなない、知っていても世間と妥協しごまかしてその日その日を送っている人生に対し、強い衝撃と深刻な反省を与えずにはいけません。それは人間の心の中にある虚偽やきたなさを鋭くあばき出すのです。

太宰治の一生は、ひとりの気の弱い、孤独な人間が、自己の宿命と倫理とに忠実であろうとした悪戦苦闘の生涯です。自己の弱さや、他人とは違っているのではないかという恐れを、決してごまかさずに純粹に持ち続け、かえってそれを深め、きわめようとしたのです。それはこの世では、許されない、実現不可能な生き方であり、あえてこの道を進んだ太宰は、実人生において挫折し、敗れ去りました。けれどかれはその身をもって生きた人生体験と自己の苦悩を、一般的な人間の本質の問題として、文学作品に表現しました。太宰治の文学は、かれがみずからためした人生の報告書であり、人間への考察であります。この作品の後には、太宰の全存在が感じられます。その意味でかれの文学は、そのまま血で書いた人生論とさえ言うことができます。わたしたちは太宰の作品を読むとき、自分たちにはできない可能性の人生を、太宰が代わって行なってくれていることに、そして極限状況に降り立った人間の真実の姿が描かれていることに感動するのです。

太宰治がその生涯をかけて目ざしたものは弱い人間に対する真実の救いを見いだすことでした。弱い人間も生きうる理想の社会を実現することにあつたのです。そしてその実現をばむ悪しき社会に、道徳に、秩序に、人間の心に、全存在をかけて反逆を試み、その反逆によって、弱いしかし美しい人間を勇気づけようとしたのです。太宰治の作品が永遠の青春文学として、今日ますます多くの人々に読まれているのは、そのたくいまれな純粹さのためと言ってよいでしょう。

わたしたちは太宰の作品によって、かれがどのような人生を送ったか、どのように人生について考え

ているかを、たどってみたいと思います。

「家」について

黄昏たそがれのころ私は叔母おばと並んで門口に立っていた。叔母はだれかをおんぶしているらしく、ねんねこを着ていた。そのときのほのぐらい街路の静けさを私は忘れずにいる。叔母は、てんしさまがお隠れになったのだ、と私に教えて、生き神様、と言い添えた。いきがみさま、と私も興深げにつぶやいたような気がする。それから、私は何か不敬二なことを言ったらしい。叔母は、そんなことを言うものでない、お隠れになったと言え、と私をたしなめた。どこへお隠れになったのだろう、と私は知っていないが、わざとそう尋ねて叔母を笑わせたのを思い出す。

私は明治四十二年の夏の生まれであるから、この大帝崩御三のときは数え年の四つを少し越えていた。たぶん同じころのことであつたらうと思ふが、私は叔母とふたりで私の村から二里ほど離れたある村の親類の家へ行き、そこで見た滝を忘れない。滝は村に近い山の中にあつた。青々

一 黄昏 夕方。夕暮れ。

二 不敬 敬わぬこと。礼を失すること。

三 崩御 天皇、太皇太后、皇太后、皇后の死去をさしていう敬語。

と苔のはえた崖から幅の広い滝が白く落ちていた。知らない男の人の肩車に乗って私はそれをながめた。何かの社がそばにあって、その男の人が私にそのさまざまな絵馬を見せたが私はだんだんと寂しくなつて、がちや、がちや、と泣いた。私は叔母をがちやと呼んでいたのである。叔母は親類の人たちと遠くの窪地に毛氈を敷いて騒いでいたが、私の泣き声を聞いて、急いで立ち上がった。そのとき毛氈が足にひっかかったらしく、おじぎでもするようにからだを深くよろめかした。他の人たちはそれを見て、酔った、酔ったと叔母をはやしたてた。私ははるか離れてこれを見おろし、くやしくてくやしくて、いよいよ大声をたてて泣きわめいた。またある夜、叔母が私を捨てて家を出て行く夢を見た。叔母の胸は玄関のくぐり戸いっぱいにふさがっていた。その赤くふくれた大きい胸から、つぶつぶの汗がしたたっていた。叔母は、おまえがいやになつた、と荒々しくつぶやくのである。私は叔母のその乳房にほおを寄せて、そうしないでけんせ、と願いつつしきりに涙を流した。叔母が私をゆり起こしたときは、私は床の中で叔母の胸に顔を押しつけて泣いていた。目がさめてからも、私はまだまだ悲しくて長いことすすり泣いた。けれども、その夢のことは叔母にもだれにも話さなかつた。

叔母についての追憶はいろいろとあるが、そのころの父母の思い出は

四 絵馬 祈願、または奉納のため、社等に奉納する馬の絵の類。

あいにくと一つも持ち合わせない。曾祖母、祖母、父、母、兄三人、姉四人、弟ひとり、それに叔母と叔母の娘四人の大家族だったはずであるが、叔母を除いて他の人たちのことは私も五、六歳になるまではほとんど知らずにいたといってよい。広い裏庭に、昔林檎の大木が五、六本あったようで、どんよりと曇った日、それらの木に女の子が多人数で上って行ったありさまや、その同じ庭の一隅に菊畑があって、雨の降っていたとき、私はやはりおおせいの女の子らと傘さし合って菊の花の咲きそろっているのをながめたことなど、かすかに覚えていられるけれど、あの女の子らが私の姉や従姉たちだったかもしれない。

六つ七つになると思い出もはつきりしている。私がたけという女中から本を読むことを教えられふたりでさまざまの本を読み合った。たけは私の教育に夢中であつた。私は病身だったので、寝ながらたくさん本を読んだ。読む本がなくなればたけは村の日曜学校などから子供の本をどしどし借りて来て私に読ませた。私は黙読することを覚えていたので、いくら本を読んでも疲れないのだ。たけはまた、私に道徳を教えた。お寺へしばしば連れて行って、地獄極楽の御絵掛地を見せて説明した。火を放けた人は赤い火のめらめら燃えている籠を背負わされ、めかけ持った人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながっていた。

て。せつながって 苦しがつ

血の池や、針の山や、無間奈落むげんなるくという白い煙のたち込めた底知れぬ深い穴や、いたるところで、青白くやせた人たちが口を小さくあけて泣き叫んでいた。うそを吐けば地獄へ行つてこのように鬼のために舌を抜かれるのだ、と聞かされたときには恐ろしくて泣き出した。

そのお寺の裏は小高い墓地になつていて、山吹やまぶきか何かの生垣いけがきに沿うてたくさんセモトの卒塔婆そとばが林のように立っていた。卒塔婆には、満月ほどの大きさで車のような黒い鉄の輪のついているのがあつて、その輪をからから回して、やがて、そのまま止まつてじつと動かないならその回した人は極楽へ行き、いったん止まりそうになつてから、またからんと逆に回れば地獄へ落ちる、とだけは言った。たけが回すと、いい音をたててひとしきり回つて、必ずひっそりと止まるのだけれど、私が回すとあともどりすることがたまたまあるのだ。秋のころと記憶するが、私がひとりでお寺へ行つてその金輪のどれを回してみてもみな言い合わせたようからんからんと逆回した日があつたのである。私は破れかけるかんしやくだまを押さえつつ何十回となく執拗しつように回し続けた。日が暮れかけてきたので、私は絶望してその墓地から立ち去つた。(中略)

同じころ、叔母とも別れなければならぬ事情が起つた。それまでに

六 無間奈落 無間地獄（八大地獄の一つ）。

七 卒塔婆 墓の後に立てる上部の塔形をした細長い板。梵字・経文の句などをしるしたもの。

八 執拗 一つのこと堅くこだわること。しつこいこと。